



# 歴史資料館だより

発行者 聖隷歴史資料館

〒433-1855

浜松市中央区三万原町三四五三

聖隷クリストファー大学五号館一階

TEL 〇五三(四三九) 三四〇七



◆聖隷歴史資料館 開館時間のご案内◆

平日(月～金)の10時～17時

(土・日・祝日と

聖隷学園の休日は休館)

## 十字の園

特集

### 祈りと奉仕から生まれた十字の園

ーディアコニッセ母の家からつながる福祉実践の歩みー

社会福祉法人十字の園 理事長 鈴木 淳司

#### ディアコニッセ来白

十字の園のはじまりに、ディアコニッセ(奉仕女)の方々の働きがありました。長谷川保氏(聖隷福祉事業団 初代理事長)がディアコニッセの方々を「物言う手」と言う記録映画で知っていたことがきっかけとなり、彼女たちを日本に迎えることになりました。記録映画が上映されたのは、一九三四(昭和九)年に御殿場で開かれた「イエスの友会」全国大会の事です。映画は、盲聾啞の子どもたちが、ディアコニッセの愛による実践を通して、希望を見いだしていく姿が映し出され、彼女たちの献身的な愛の姿に長谷川保氏は感動し、心に強く残りました。その大会で、長谷川保氏は主催者である賀川豊彦氏に援助を求め、賀川豊彦氏より助言を受け、長谷川保氏は聖隷

社(当時)の結核患者の困難な状況と社会的弱者の困窮した現実を大会参加者に訴えました。そこで「一坪献金運動」が決議され、全国の有志に呼びかけられました。この運動により全国から寄せられた献金は、浜松市三万原の土地取得に繋がり、行き場を失った結核患者や生活困窮者を支える基盤となりました。後にその土地の一部を譲り受け、十字の園が建てられる場所となって行きました。



長谷川保氏

一九四五(昭和二〇)年、浜松は空襲により壊滅的な被害を受け、その痛手を大きく残したまま終戦となり、聖隷保養農園(当時)は野戦病院のような状況となっていました。その中で長谷川保氏や鈴木生二氏(十字の園 初代理事長)ら聖隷保養農園の一人ひとりが、神に祈り、戦後の復興と隣人愛による社会福祉の実践を愚直に行っていました。長谷川保氏は戦後初の衆議院選挙に当選し、政治の場から生活保護法の制定など社会保障制度の整備に尽力しましたが、その一方で、制度だけでは救えない現場の痛みを強く意識していました。

こうした状況の中、ドイツ・ブレメン教区長P・G・メラウ牧師が来日し、上野駅地下道に集まる戦争孤児の姿に、戦後の復興が進まない日本の現実を目にし、衝撃を受けました。「日本の教会はなぜこの現実には手を差し伸べないのか」と言われ、必要であればドイツからディアコニッセを派遣できると、復興支援を申し出られました。その申し出に最終的に応えられたのは、戦前にディアコニッセの働きに出会ってい

た長谷川保氏でありました。

一九五三(昭和二八)年十一月、ドイツ・カイザーズヴェルト連合に属する五名のディアコニッセと一名の女性宣教師が来日しました。彼女たちは、祈りと奉仕を生活の中心に、看護をはじめ社会奉仕を使命としていました。聖隷保養農園や病棟で働きはじめた彼女たちの中に、ハニ・ウォルフと言う一人のディアコニッセがいました。彼女は、卓越した適応力と献身性で、現場の課題に積極的に取り組まれ、後に十字の園創設の中心人物となって行きました。



ディアコニッセ来浜

## 十字の園老人ホーム創設の決断

ディアコニッセとして奉仕する中で、ハニ・ウォルフ姉妹は、夏になると日本の蒸暑さを避けるため、奥三河の洪川の山に小屋を建ててもらい、そこで過ごす事が常となりました。その道すがらの家に、働きに出た家族を待ちながら、床に伏しうつろに外を見ている高齢の方の姿に出会いました。悲しく、うつろな目は、無位無冠、無報酬で神の僕として隣人に仕え、老後など考えることもなく、神に委ねていた仲間の将来と重ねられていきました。そして、ハニ・ウォルフ姉妹の心に深い問いとせずと響いていました。

時が経ち、戦後復興の支援の必要が減って、ハニ・ウォルフ姉妹は自分自身の日本での働きをどうしていくべきか悩むようになり、その事が毎日の祈りとなっていました。その思いがずっとある中で、ハニ・ウォルフ姉妹のいる洪川の小屋が台風にあわれ、土砂崩れで小屋が傾き、あわや押し潰されそうになりました。ハニ・ウォルフ姉妹は、片付けなどしながら一人助けを待ちました。四日間眠れない日が続き、しだいに話す力も歩く力もなくなつて、布団の上に横になって「神様、神様、私は何もできない人間ですから、どうして私を日本に送られたのですか？本当に、私にすることがあれば教えてください」と祈りました。心

は落ち着きを取り戻し、そして眠ってしまいました。目が覚める前に一つの夢を見ました。その夢では、男の人が部屋に入ってきて、きれいな看護をなさるけれども、部屋にいる一人の高齢の女性とは話もせずに行ってしまう。それで、私の方のところに行つて注射をしようとする、「誰も私の話を聞いてくれない」と高齢の女性は泣いておられました。だからそこに坐つてお話を聞いてあげました。

目が覚めたハニ・ウォルフ姉妹は、これまで心に思っていたことに神様が答えてくださり、「一人で寂しく寝ている老人のための家」をつくる事が私に与えられた使命だと心に



建築への祈り

力が湧いて元氣になりました。

一九五九（昭和三四）年、ハニ・ウォルフ姉妹は一人寂しく寝ている老人のための家、老人ホームの建設のための資金を、祖国ドイツに求め、六年ぶりに帰国の途に就きました。祖国ドイツで、各地の教会やディアコニッセ母の家を巡り、日本の現状を訴え、日本の風俗を知ってもらおう芝居や語りをし、献金を募りました。そして約六百万円という多額の支援が集まりました。この献金はすべて日本での老人ホーム建設に捧げられました。

ハニ・ウォルフ姉妹は、新しくできた老人ホームは「人間の力ではなく、神様の力の大きさでやりたい」と強く望み、聖隷福祉事業団の中でするのではなく、新たな社会福祉法人とすることを願ひ、長谷川保氏をはじめとする聖隷福祉事業団の役員の皆様にお許しいただきました。その後、聖隷福祉事業団の土地の一部を無償譲渡していただき、聖隷厚生園次長のまま、鈴木生二氏が設立準備責任者となり、聖隷福祉事業団の中から新たな法人が生み出されて行きました。

一九六〇（昭和三五）年十二月二八日、社会福祉法人十字の園の設立が認可され、翌一九六一（昭和三五）年一月二〇日、老人福祉法ができる前の生活保護法による保護施設として「十字の園老人ホーム」が開設さ

れました。定員三〇名という小さな出発でありましたが、路上で生活をされていた方や寝たきり、身体の弱い高齢者を中心に受け入れられ、ご利用者本位のケアが徹底され、シーツやおむつは職員の手作りで用意するなどして、何もかも工夫しながら支援を形作っていきました。



裁縫

## 発展と地域福祉への広がり

一九六三（昭和三八）年、老人福祉法が施行される背景となったのは、ディアコニッセの方々と一緒に作り上げていった十字の園の働きが、衆議院議員であった長谷川保氏を通して国の制度のひな型の一つとされていき、老人福祉法の中に特別養護老人ホームが制度として整えられたことでした。十字の園が工夫して作り上げていった取り組みが、先駆的モデルとして制度に反映されて、十字の園は、老人福祉法の特別





養護老人ホームとして、施設の規模は、高齢の方々の困難さに応えるべく大きくなって行きました。三〇人の小さな施設だったものが、五〇人、一〇〇人、一二〇人と定員を増やしていきました。

そして、特別養護老人ホームが各地で開設されるようになり、十字の園は浜松だけでなく不思議に各地に広がっていきました。

その最初の地が、イエスの友会で一坪献金運動が決起された御殿場の地でした。御殿場では、御殿場教会の方々が、地域の高齢者の課題と向き合い祈る中で、十字の園の初代理事長鈴木生二氏に教会を通じて相談をいたしましたところ、鈴木生二氏は、行く道を家族には相談せず、一心に神様に祈り求めました。

そして、御殿場の地で一から地域の皆様と一緒に新たな施設を立ち上



初めの十字の園



御殿場十字の園  
林富美子医師

げる決断をされ、浜松の地から、御殿場へと居を移し、神様の御導きにより、一九七一（昭和四六）年に御殿場十字の園が開園されました。喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマの信徒への手紙一章一五節）の聖句を大切にし、人生の仕上げの段階にある一人ひとりを尊び、他のところでは受け入れが難しいような方に、最後まで寄り添



施設礼拝

い続ける支援を行いました。一九九九（平成一一）年には全面改築を行い、地域に開かれた総合福祉施設として、障がい者支援や地域包括支援事業、グループホームなどを開設し、地域の課題と一つ一つ丁寧に向き合い、寄り添い続ける支援を続けています。

一九八一（昭和五六）年には伊豆高原十字の園が、伊豆半島特有の地域課題に向き合うべく、日本老人福祉財団の特別の協力の下、土地をお借りして特別養護老人ホームを開園。その際には、地域全体で支えていただき、自治体から助成を受け、海外キリスト教宣教団体や伊東教会を中心とした教会群の支援をいただきました。二〇一一（平成二三）年にはお借りしていた土地をお返しして、直ぐ近くに現在の土地を購入し、全室ユニット型個室の総合福祉施設を移転改築いたしました。

高齢者を「支援される存在」ではなく、「表現する主体」として尊重し、地域で生きがいをもって暮らし続けられるように、地域での役割を持ちながら関係を継続していく場として、こども食堂などを運営しています。運営では、地域の方の集まりである地域ふさと協議会の方々が主体となつて、意見を出し合い取り組みが深まるように地域連携を進め歩んでいます。



伊豆高原十字の園

二〇〇二（平成一四）年には、介護保険法施行後すべての市町に特別養護老人ホームをとの高齢化問題への投げかけに、松崎教会の方や地域の方々が自分達の地域の福祉をどのように形作っていくか、検討され、その中で高齢者福祉のみならず、伊豆半島の南側、賀茂地区の障がい者支援の課題とも向き合い、両方の施設を一緒になって運営していく事はできないかと協議をしました。そこで、高齢者介護施設に身体障がい者施設を併設することで、身体障がい者の方の高齢化も踏まえた、生涯安心できるケアの実現を目指すことになり、特別養護老人ホーム松崎十字の園と身体障がい者支援施設オリーブが、松崎町の土地をお借りして開園いたしました。

施設は町の中心部にあり、地域にも親しまれ、施設に入所後も家で過ごす時間や、お墓参り、お祭りなどへの参加がしやすいようにサポートし、施設に入っても地域の生活が途



十字架の園は、このように弱く小さくされた方々の困難さに神様が深く目を止められて、その眼差しの中で出会ったことを、自分の使命とした先達の信仰に、ドイツの教会をはじめ、日本の教会、地域の皆様、行政の方々が応えてくださり、支えられてきました。今も、苦難の先に神様の恵みが届けられるように、神様の力を頼りとして、ご利用者の傍らに立ち続けて一緒に歩んでいます。

この他に、ケアハウスを浜松で二つ、御殿場で一つ運営し、伊東市から運営委託を受け養護老人ホームの運営を行っています。

切れないような環境づくりをしています。地域の方と顔の見える、地域に根ざした支援をさせていただいています。

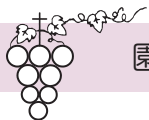


ご利用者と松崎港にて



改築中の浜松十字の園 完成予想図

理念「夕暮れになっても光がある」(ゼカリヤ書一四章七節)に示される先達の信仰が、今の私たちを支え、明日に向かう力を与えてくださっています。一人のディアコニッセの祈りに神様がともされた希望の光は、多くの方の思いに重ねられて広がり、そして、神様が示されたそれぞれの地で、今も礼拝を通して希望の光が指し示されています。



## 園長さんのクリスマスプレゼント

加藤 はる

特別養護老人ホーム十字の園での私の介護の仕事の出発点になった就職当初のことを思い出します。

1966(昭和41)年、事業の失敗から私たち夫婦と2人の子供(2歳と4歳)、そして夫の母とその子供2人、計7人はすべてを失い、8畳と2畳の小さな借家に身を寄せてこれからどうしたらよいのかと途方に暮れていました。その時、わかば保育園の宮崎まさ子園長さんのお計らいで十字の園に就職することができ、生きる道が開けました。

勤め始めて最初のクリスマスのことでした。夕食の支度をしていた時、何か音がしたように思い外に出てみると、玄関の前にクレヨン、えんぴつ、スケッチブックが2セットと「主の恵みがあなたがたの上にありますように」という御言葉と葡萄の絵が描かれたお皿が置いてありました。鈴木生二園長さん・フミさんご夫妻から私の2人の子供への心からのプレゼントでした。

なんとありがたいこと、素晴らしい園長さんのもとでお仕事ができる！喜びと感謝の気持ちでその場にくずおれそうになった私。この十字の園で精一杯尽くそうと決心した瞬間でした。その後も折りにふれ「ご苦労さま」とかけてくださった言葉が何よりの救いでした。

介護職員としての生活を振り返るとき、高齢の利用者の方々が激動の時代 ― 戦争、災害など幾多の困難を乗り越え、今日の日本の礎を築いてくださったことが私の心に刻まれています。就職間もないころ園長さんとの面談で聞いた「年齢を重ねても各々の自由と可能性がある」という言葉を胸に、利用者の方々と共に励み合い、喜びの中で50年以上勤務することができましたことに感謝で一杯です。今でも草取りなどのボランティアで園と関わりを持つことができています。十字の園ではたらきが私の人生の宝となり、何よりの幸せです。





## \*\*\*\* 聖隷グルーブの動き \*\*\*\*

### 聖隷福祉事業団

2025年は、人口減少と物価・人件費の高騰といった課題に真正面から向き合い、将来にわたって安定した運営を続けるための取り組みを本格化させた一年でした。人材不足が深刻になる中で、外国人材を大切な仲間として迎えることを重要な方針とし、2025年4月に「聖隷国際人材センター」を設立しました。現地での採用活動をはじめ、日本語や介護技術の研修、来日後の生活サポートまでを一体的に行い、安心して働き続けられる環境づくりを進めています。将来的には、地域の外国人材を支え、育て、定着につなげる取り組みにも広げていく予定です。また、ICT機器の活用推進や障害者雇用の創出など、働きやすい職場環境づくりが評価され、「令和7年度介護職員の働きやすい職場環境づくり内閣総理大臣表彰及び厚生労働大臣表彰」において、奄美佳南園が厚生労働大臣表彰優良賞、松戸愛光園が奨励賞を受賞しました。

2026年度からは、「Vision2030「未来への選択と最高の質の追求」の実現に向けて、第3期中期事業計画2026―2030が開始します。そして、初年度の事業方針であ

る『更なる理念の実践』と『デジタル活用』で未来を切り拓く』のもと、これまで大切にしてきた理念を土台に、デジタル技術を活用したサービスの質の向上と業務の効率化を進めてまいります。



浦安・松戸地区所属の特定技能職員、成田空港到着！

首相官邸にて  
右) 聖隷福祉事業団青木理事長  
左) 奄美佳南園村田施設長 (当時)



(12/23 常務執行役員 彦坂浩史)

### インド聖隷希望の家

聖なる喜び満ちたクリスマスにありこれまで私たちが分かち合ってきた命と愛という贈り物に対して神に感謝します。クリスマスは、イエ

ス・キリストの誕生に示された限りない神の愛をあらためて思い起こさせてくれます。それはすべての人、特に貧しい人々、見捨てられた人々、そして障がいのある人々を包み込む愛です。

### クリスマス

の季節は、私たちに思いやりと慈悲の使命を貫くよう促してくれま。暗闇には光を、絶望あるところには希望を、そして尊厳が忘れ去られた場所に尊厳をもたらします。笑顔、親切な行い、そして理解の瞬間一つ一つが、クリスマスの真の精神を映し出します。



この36年間、私たちと共に歩んでくださったすべての支援者、友人の皆様、そして温かく見守ってくださる方々に心から感謝申し上げます。皆様の暖かいご支援と愛は私たちの施設を利用している人と私たちの地域で援助を必要とする人たちの日々をより明るく照らす力となっています。皆様のお祈りと暖かいご支援により私たちはつましい奉仕を続け

障がいのある人や支援の届かない高齢者たちの生活に光をもたらすことができます。

クリスマスの平和と喜びが皆様の心とご家庭を満たし、新年が健康と幸福、そして豊かな祝福をもたらしますようお祈りします。

### ■スタッフの大学院入学



わたくしデイル・ジョージ・ヴァルゲーゼ(注・アブラハムさん次男で希望の家職員)はリハビリテーション科学の修士号を取得することを目指して昨年9月に浜松に来て聖隷クリストファー大学リハビリテーション科学研究科作業療法学専攻に入学しました。今後2年間、日本で学ぶこの旅は、私の学業と人生における重要な節目となります。

私が作業療法学の学びを目指す理由は、障がいを持つ人々に寄り添うことを私の使命とするからです。希望の家でのこれまでの経験を通して、多くの利用者はケアだけではなく、自立と尊厳、そして生活の質を高める体系的な治療を必要としていることに気づきました。作業療法は身体的、心理的、社会的そして環境的側面を統合した包括的かつ個人へ



のアプローチを提供するものであり、希望の家におけるリハビリテーションと長期ケアの現場において不可欠であると考えました。そこで私の研究は、体系的な作業療法介入を通じて知的障害のある人々の日常生活スキルと社会参加の向上に焦点を当て、その研究成果を希望の家において体系的に活用し、治療サービスの提供向上、スタッフの能力強化、そして持続可能なエビデンスに基づくケアの実践の促進に役立てたいと考えています。

神様の変わらぬお導きと祝福に深く感謝するとともに、このコースを履修するにあたり、聖隷クリストファー大学の皆様の惜しみないご支援に心から感謝します。故郷を遠く離れた浜松の地で新たな一歩を踏み出すにあたり、これまで私を支えてくださった皆様の祈り、愛、そして温かいお言葉に深く感謝し、いつの日かより一層の献身としたいやりをもつて他者に奉仕できるようになることを楽しみにしています。

(12/25 代表 V・アブラハム)

## 十字の園

### 新しくされる

昨年来皆様にお祈りいただいております浜松十字の園さつき棟改築工事におきまして、いよいよ今年は完成する年となります。



これまでの旧さつき棟は、五〇年前に建てられたこともあり、木の趣が随所に見られ、床はビカピカに磨かれていました。廊下に面した大きな窓からは、木漏れ日がさし、ご利用者が日向ぼっこをされていた穏やかな風景が思い出されます。

### 旧約聖書



ハガイ書二章九節には「この新しい神殿の栄光は昔の神殿にまさると万軍の主は言われる。この場所にわたしは平和を与えると万軍の主は言われる」とあり、新しくされるさつき棟を神様が恵の場としてくださることに信頼し、現在手狭になった本館棟では、ご利用者、職員が工夫をしながら上手に生活をして下さっています。ご不便をおかけして申し訳ありませんが、日々進む工事の進捗をお伝えしながら、新たな生活にむけて心も体も準備をして完成の時を待っています。

## 聖隷学園

### ■新設「グローバルスクール中等部・高等部」開校

新しいさつき棟も、これまで職員、ご利用者と一緒に作ってきた雰囲気を残し、あたたかで、穏やかな、包み込むような施設にしていきたいと思っています。

(1/7 理事長 鈴木淳司)

本年4月に聖隷学園の新たな中等学校として「聖隷クリストファーグローバルスクール初等部・中等部」がスタートします。英語イマージョン教育と、昨年認定を受けた国際バカロレア・ディプロマプログラム(DP)の実施により、「隣人愛」の精神を世界で発揮できる次世代のグローバルリーダーの育成を目指します。DPは海外大学進学の手続きにもなる高校2・3年次に行う世界共通の教育プログラムです。新校舎の完成と同時にグローバルスクール新高校2年生がDPの学びを開始します。また小学校を「初等部」に校名変更し、12年間の先進的なグローバル教育をより明確に実施します。



新校舎パース図

### ■甲子園初出場ご支援に感謝



高校野球部は昨年、夏季静岡県大会において創部後初の優勝を飾り、悲願の甲子園初出場を果たすことができました。甲子園にはアルプスタンドを埋め尽くす大応援団が集結し、聖隷一体となった声援は選手たちのプレーの力となりました。1回戦は見事勝利し、全国に「聖隷クリストファー」の校歌(讃美歌393番)を響かすことができた忘れられない、記念すべき夏となりました。多くの皆様からご厚志と温かいご声援をいただき心より御礼申し上げます。今後とも変わらぬご支援をどうぞよろしく願います。

(1/8 理事長 小柳守弘)





## 牧ノ原やまばと学園



近くの河津さくらを見に

### ■大きな出来事

★「コスモス」は、「生活介護事業所・ケアセンターコスモス」に、名称も種別も変更し、「働く生活介護」として活動を開始しました。

★障害者支援施設を希望するEPA生は少ない中、垂穂寮の二名に加え、本年も希望寮にインドネシア人女性二名が就任。重い障害者たちに初めて接し衝撃を受けたようですが、最近では「かわいい」と語っています。EPA生全員が、看護師資格を持つクリスチャンです。

★二つの特養ホームに、法人の障害者施設から転入する人が増え、ホーム創設の目的を果たしています。

★聖ルカホームでは、「ユニトリードラー・実地研修施設」になるよう勧められ、三か月間講師の指導を受け、中身の改善と充実に努めました。判定は、三月初めの予定。

★逝去されたご婦人二人から、計三千八百万円の遺贈が寄せられ、その一部を、九事業所の「車」買替のため活用させて頂きました。感謝。

★九月に最大級の竜巻発生。法人は無事でしたが、職員（二十四名）の家屋が被災。全国から寄せられた見舞金七〇万円余を活用させて頂きました。皆で感謝しています。



仲間と共に  
干し柿づくりに挑戦

### ■新年の計画

①「経営／支援／人材／研修／建物・環境／地域」の六グループからの提案も含め、「やまばと未来計画」2026年度分を実施します。

②四年後の「小学校統合と廃校／跡地活用」に関し、承認されれば「未来の福祉施設計画」に着手。  
(1/8 理事長 長澤道子)

### 小羊学園

昨年、小羊学園は理事長の交代という大きな転換期を迎えました。六月に、三十年の長きにわたり理事長の重責を担ってこられた稲松前理事長が退任され、私、雨宮が就任した

しました。創設からの理念と精神を継承し、聖隷グループの皆様とも力を合わせ、地域の福祉と小羊学園の一層の発展のために努めてまいり所存です。

昨年は「つばさ静岡」（重症心身障害児者施設）と「マルカート・ドルチェ」（生活介護施設・放課後等デイサービス）が創設二十周年を迎えることができました。当時は、社会福祉基礎構造改革が進められ、将来を見通すことが難しい状況の中で、いずれの施設も開設までに様々



つばさ静岡創設20周年  
(コロナ禍を経て5年ぶりのフェスタつばさ集合写真)



稲松前理事長より  
委嘱を受ける雨宮理事長

な困難がありました。しかし、開催された記念会においては、そうした苦労以上に利用者の皆さまとの楽しく充実した日々や、多くの方々を支えられた感謝の歩みが語られました。

本年、小羊学園は創設六十周年を迎えます。創立者の山浦先生の三十年、稲松前理事長の三十年と、一貫して重い障がいをする方々を支援する歩みが続けられてきました。働き手の確保や多くの福祉課題のある厳しい時代ですが、神様の導きと皆様の支えに感謝しつつ、これからも同様の歩みを続けてまいります。

(1/8 理事長 雨宮 寛)

### ブラジル希望の家

社会福祉法人ブラジル希望の家は、知的障がいのある63名（女性33名、男性30名）を支援している福祉施設です。ブラジル・サンパウロ州イタクアケセツバ市に所在し、利用者一人ひとりに寄り添った包括的ケア、社会的包摂、自立支援を重視した活動を行っています。

当法人の使命は、知的障がい者および高齢者の生活の質の向上を図り、人間性を尊重した、倫理的かつ専門的な環境のもとで、自立を促進することです。すべての活動は、尊重・尊厳・人間の価値の重視を基本理念としています。



## ■陶芸・紙おむつ製作活動の修了 および修了証書授与



陶芸および紙おむつ製作の作業所において、1年間継続して活動を行った結果、利用者者は学習の機会を得るとともに、手作業の技能向上や

自己肯定感の強化を実感することができました。期間中には、地域の方々を迎え、活動に参加していただき、陶芸作品の制作工程を間近で知っていただく機会も設けました。活動の成果を称えるため、作業所修了証書の授与式を、施設のクリスマス会とあわせて実施しました。この行事は年末の祝賀にとどまらず、参加者一人ひとりの努力、継続的な取り組み、そして個々の成長を称える大切な機会となりました。

## ■厨房搬入口エリアの建設

2025年には、施設のインフラ整備の一環として、厨房の搬入口エ

リアの建設が完了しました。本工事は、公益財団法人宮坂国人財団のご支援により、必要な資金の一部をご提供いただき実現しました。この投資により、厨房の整理整頓、衛生管理、業務効率が大きく向上し、日常の支援体制が強化されました。あわせて、より安全で効率的、かつ衛生基準に適合したサービス提供が可能となりました。

## ■施設主催イベント

希望の家では、毎年、ボランティアによるチャリティ昼食会、フェスタ・ジュニーナ（6月祭）、フェスタ・ド・ヴェルデの3つの主要な施設イベントを開催しています。2025年には、JICAの支援により導入された各種設備を活用することで、イベントの運営体制および内容の質が大きく向上しました。



これらのイベントは、地域との交流を促進するだけでなく、施設運営に必要な資金を確保する重要な役割を担っており、法人の財政的持続可

能性に大きく貢献しています。

(1/8 募金活動スパーバイザー

サンドラ・スミレ・サカタ)

## 遠州栄光教会

昨年2025年は、新約聖書のエフェソの信徒への手紙1章22-23節を年度の主題聖句として歩みました。『神はまた、すべてのものをキリストの足もとに従わせ、キリストをすべてのものの上にある頭として教会にお与えになりました。教会はキリストの体であり、すべてにおいてすべてを満たしている方の満ちておられる場です。』



住吉礼拝堂  
クリスマス礼拝

長く牧師一人の体制が続いて、諸施設での奉仕が十分に捧げられずにいますことを、お詫び申し上げます。教会の働きが豊かにされ、聖隷グループの創立の精神が輝き続けていきますように、教会全体で牧師招聘の祈りを祈ってまいります。

2025年は、三方原会堂のクリ

スマス礼拝で2人の方たちの洗礼式が行われ、新たに教会員としてお迎えしました。お一人はゆうゆうの里にお住まいの方、もうお一人は、親子二代にわたって聖隷三方原病院で働かれた方です。

わたしたちの国にはクリスマスチャンは人口の1%に満たないと言われます。しかし、この浜松の地には2026年、聖隷社の創業から100年の時を迎える聖隷グループの交わりが、多くの方々が聖書的な精神や文化に触れる豊かな場となっている、特別な地です。



三方原礼拝堂

これからも聖隷グループの交わりのなかに教会がたてられていることが変わることのない光となりますように、皆様のすべての尊い歩みと働きに祝福が満たされることを祈ってまいります。良き交わりを、どうぞ宜しく願います。

(1/13 主任牧師 星野 健)



## 神戸聖隷福祉事業団

創業50周年、

そして第6期中期計画へ



202

5年度

は、神戸聖隷福祉事業団にとって創業50周年という大きな節目の年度となりました。年間を通してさまざまな

な記念事業を実施し、記念式（記念礼拝）（6/21）、記念式典（10/17）には、多くのご利用者、ご家族、関係者の皆さまにご参加いただき、これまでの歩みに感謝をお伝えするひとときとすることができました。

また、記念事業の一環として実施した第6回タイ国理念研修では、日頃より多大なご支援をいただいている聖隷福祉事業団から4名の職員をお迎えし、創業の精神や理念を改めて共有する、非常に有意義な研修となりました。

そして、51年目を迎える2026年度からは、第6期中期計画（20

26（2028年度）のもとで事業を推進していきます。第6

期中期計画では、「ミドルアップ・トップダウン」という考え方を基本

に据えました。理事会・常任理事会をトップ、各施設・事業所をボトムとし、その中間に但馬地区、神戸地区の二つの地区をミドルとして位置づけています。地区のビジョンや方策を重視し、それを法人全体の中期計画の中核として反映させ、全体へと展開していく仕組みです。

地域の事情や課題は地区によって大きく異なり、その違いは今後さらに顕著になると考えています。異なる二つの地域を包含する法人として、地域実情に即した事業展開を実現するための中期計画とすることを目指しています。

かつて経験したことのない社会変化の中にあっても、「変わりゆく社会に、変わらない使命で希望を創ります。」というビジョンを掲げ、神戸聖隷福祉事業団は次の歩みを進めてまいります。

（1/14 常務理事 村山盛光）



## 聖書のことば

そこで弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫のために働き手を送ってくださるように、収穫の主に願いなさい。」

マタイによる福音書 九章37～38節  
学校法人聖隷学園 宗教部主任 仲 義之

イエス・キリストの活動はこの直前の聖書箇所で、「教え」と「宣べ伝え」と「いやし」として3つにまとめられています。現代では順番に「教育」「宗教」「医療・福祉」として多くのキリスト教諸団体の活動の基礎となっており、聖隷グループもこのイエス・キリストの地上での働きに挑戦・参与して来た、ということができるでしょう。

聖書の言葉は「働き手を送ってくださるよう」に、収穫の主に願いなさい。」と続きます。歴史資料館に記載された名前や出来事の連続は、聖書の視点からは「収穫の主がどのような働き手を送って下さり、どのような結果を得たか」ということであり、「隣人愛」の教えの実践を「教育」「宗教」「医療・福祉」の視点から、具体的に、誠実に取り組んだ人々の記録なのです。歴史資料館はその諸々の出来事を「想起しつつ、思いを巡らす場」です。多くの働き手が呼びかけられてイエス・キリストの教えと働きを祈りつつ実践した事によって、「今」があることを想起し、

また「将来」の働きに思いを馳せる場です。

その研究によって結核に対する特效薬となるストレプトマイシンを發明し、1952年にノーベル生理学・医学賞を受賞した科学者セルマン・アブラハム・ワックスマン博士の墓碑には、「地が開いて、救いが実を結ぶように。Earth will open and bring forth salvation. (イザヤ書45章8節)」という言葉が刻まれています。科学者として土の中の菌類（放線菌）の研究を積み重ねながら、この聖句がその座右にあった事は、祈りの心が医学の進歩の情熱と結びついた一例として記憶され続ける価値があると思います。

「救いの実りを収穫したい。」聖隷グループの刻んできた歴史においても、それを目指した働き手たち、またその方々によって救われた人たちが確かにいました。将来を祈りつつ、常に記憶し続けていきたいと思っています。



# 長谷川保聖書研究 マタイによる福音書第七章 十六節～二十三節

「実によって木を知る」

16節、「あなたがたは、その実によつて彼らを見分けるであらう。茨からぶどうを、あざみからいちじくを集める者があるうか。そのように、すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ」。

日本のウメモドキは私の好きな木ですが、その中でクロウメモドキというのが茨の一種にありまして、小さい黒い実が成る。それがぶどうによく似ているんですね。それから「あざみからいちじくを集める者」とあるのは、あざみの一種で、花が遠くから見るといちじくの実に似ているものがあつたのだそうです。そこでこういう言葉が出てくるのですね。だから「そのように、すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ」と。「悪い」というのは悪性のとかよこしまなとか、悪意を持ったというような意味の言葉です。

18節、「良い木が悪い実をならせることはないし、悪い木が良い実をならせることはできない。良い実を結ばない木はことごとく切られて、火の中に投げ込まれる」。もうほろほろになってしまつて、だめになつてしまつたような木というものは良い実を結ぶということはありません。だから切られて火の中に投げ入

れられてしまう。「このように、あなたがたはその実によつて彼らを見分けるのである」。どういふものであるか彼らを実によつて見分けなさい。だから実際そこで生活をしていふやり方、行いをしていふやり方を見れば、それが偽預言者であるかほんとうの預言者であるかということとはあなたがたにわかる。その実によつて彼らを見分けるのである。

「あなたがたのことは知らない」

21節、「わたしに向かつて『主よ、主よ』と言う者が、みな天国に入るのはなく」、主よ、といくら言つても皆が天国へ、神の国に入るのはない。この神の国、天国は天の神の支配、神の統治というような意味の言葉です。二つ言葉が重なつています。つまり主よ、主よと言つていても、そういうものはみんな神、天は神の在すところという意味です、神の在すところの神の統治、神の支配に入つていふのではないと。「ただ、天に在すわが父の御旨<sup>みこころ</sup>を行ふ者だけが入るのである」。「御旨」はセレーマというギリシャ語ですが、これは意思された内容、つまり神が意思されたその内容を行ふ、「行ふ」は実行する、働く、これはポイオーです。実行する、行ふ（神の意思された内容を実行する、あるいは働くという意味もあります）者だけが入るのである。「入る」という言葉、これは一人ずつ来るといふ

意味の言葉です。ギリシャ語ではエイスエルコマイ。私どもが天国に行くときには皆、一人ずつ入つて行くのであつて、仲間を一緒に連れて行くわけにはいかない、これは実に人格というものの重みを言つていふことで、面白い、それは嘘ではないと思ふのです。例えば指紋とか声紋とかはみんな違うでしょう。まあ指紋は何百万人、何千万人とかに一人同じものが出てくるといいますが、声紋の方がまた違うのですから。あらゆるところでみな違つていふわけです。個人の人格というものが、死の彼方の永遠の世界まで続くという証拠だと思ふのです。

私はやつぱり個人といふものを、一人ずつ神様が造りになつたといふことを考えるのです。人格といふものは全く違つていふ。だから私どもは、いいかげんな生活ができないわけです。それぞれが自分の人格に対する自分の行動、生涯に対して責任を持つていふ。それは神に全て覚えられていふことなのです。だから御旨を、神の御意志を実行する者だけが一人ずつ神の国へ入るのだといふことです。

私どもは、ただイエス・キリスト、十字架を信ずる信仰によつてのみ神の国に入るのですけれども、その点はずすと大変なことになる。私どもは何らの功績もなく神の国に入りますが、イエス・キリストの十字架の罪の赦しによつてのみ、神の

国に入るといふことを教えられた時に、私どもの生活がどんなに間違ひだらけのものであつても、ひねくれた性質のものであつても、本質的に変わつてくるということなのです。

つまり回心ということ、悔い改めるといふことは、私どもの身になお、実に卑しい汚いものがくつていきますけれども、それでも確かに私どもの人生の目的は根本的に変わつて、神と人とに仕えるために真理に生きようとする。ただ私どもの罪がまだことごとくは解決されておらず、救いが完成しておりませんから、なお私どもは多くの間違ひを犯します。間違ひを起こさない人間はどんなに救われた者としてもあり得ない。私どもの救ひは天に至つたときに完成するからで、地上ではやつぱり開始と成長だけがある。

これはカルビンもウエスレーも言つていますね。ルターははつきりと、蛇の頭は砕かれてもなお体が蠢<sup>うごめ</sup>ていふ、と言つています。蛇を殺して頭を叩き潰しても体が動いていふ。我々の中の罪のかしらである頭は砕かれた、しかし私どものうち、なお蛇の体は動いていふ。それにもかかわらずイエス・キリストの十字架をほんとうに知つた時には、私どもの人生の目的が変わつたということですね。

（聖句の引用は口語訳聖書による。既刊「長谷川保聖書研究 マタイによる福音書」より）